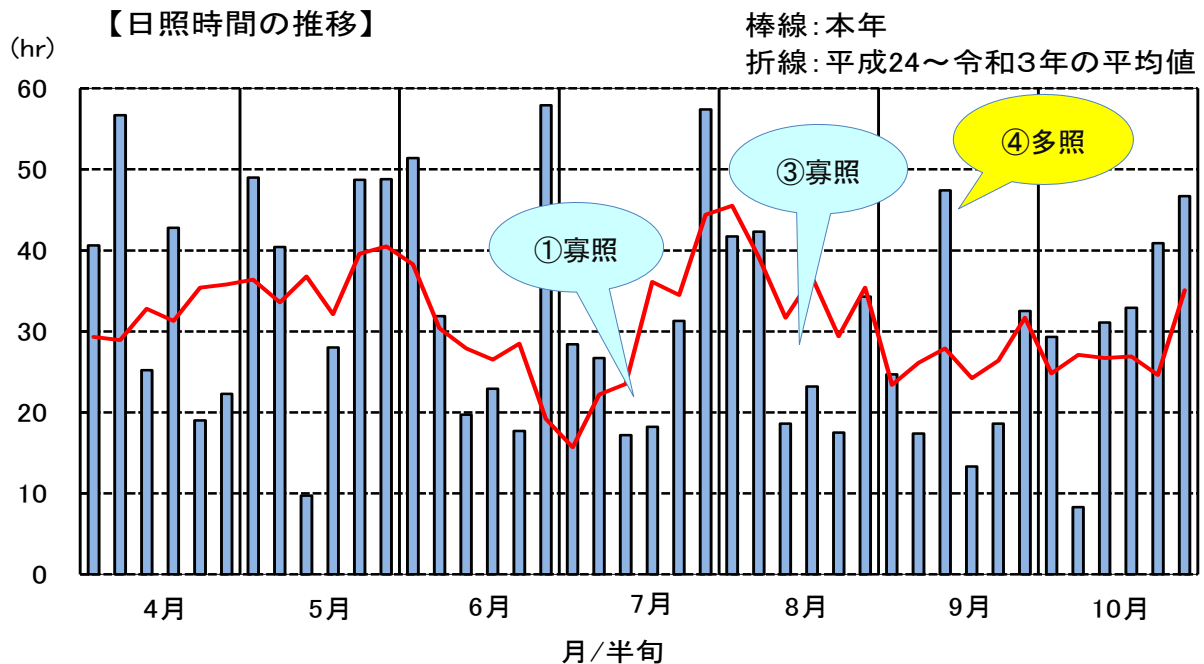
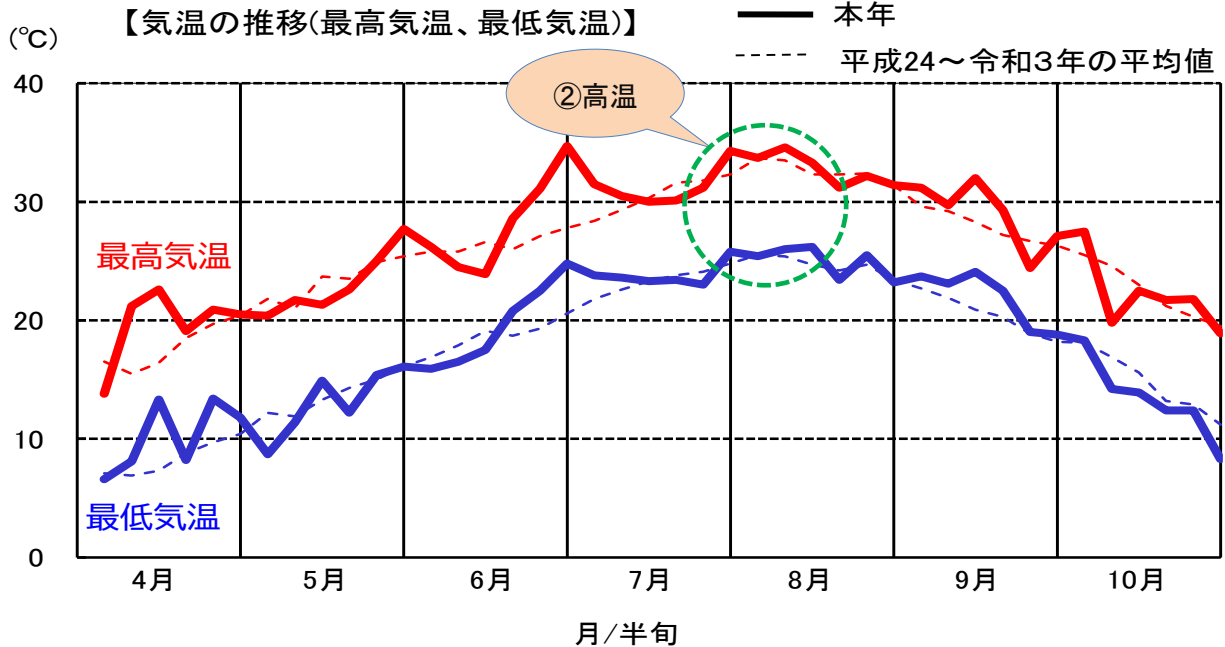


令和4年産米の作柄と今後の対策について

1 稲作期間中の気象(彦根気象台観測)



【早生品種】

- ① 【7月中旬の寡照・多雨】寡照が続き、稈長が伸長→倒伏
- ② 【7月下旬～8月中旬の高温】登熟期前半の高温障害→白未熟粒
- ③ 【8月中旬～下旬の寡照】光合成不足により、粃へ転流するデンプンが不足→白未熟粒

【中生品種】

- ④ 【9月中旬の多照】登熟期後半の多照により品質は良好

2 作柄・品質の状況

1) 作況指数(12月9日農水省公表)

		予想収量 (kg/10a)	作況指数 (前年同期)
滋賀県	全県	523	101(100)
	湖南	532	101(100)
	湖北	505	101(100)
近畿		517	102(99)
全国		536	100(101)

2) 1等米比率(10月31日現在・農水省公表)

	1等米比率(%)		
	4年産	前年同期	前年最終
滋賀県	66.6	79.6	79.0
近畿	60.1	73.6	75.0
全国	79.4	83.6	83.1

※ 水稻うるち・全銘柄平均

※ 前年最終は、R4年3月末現在の速報値

3) 品種別の状況

品種名 (R4 作付比率(%))※1	収量※2 (平年比較)	1等米 比率(%)※3	前年 同期	概況
[早生] みずかがみ (10.7)	並	88.6	94.4	・幼穂形成期頃が高温・多照で経過したことで穂数は平年より多く、籾数は増加した。7月下旬～8月上旬の高温・多照により登熟が順調に進み、出穂から成熟までの日数は早くなった。一部では白未熟粒が増加したが、品質は平年並であった。
[早生] コシヒカリ (34.2)	並	58.1	77.2	・幼穂形成期頃が高温・多照で経過したことで穂数は平年より多く、籾数は増加した。8月中下旬の日照不足や倒伏により登熟歩合が低下し、くず米が多かった。品質は、出穂期にあたる7月下旬からの高温・登熟期後半の日照不足の影響から、白未熟粒による格落ちが目立ち、1等米比率は平年より低かった。
[早生] キヌヒカリ (19.1)	並	45.6	72.5	また、一部のほ場ではいもち病の発生、降雨による倒伏や台風前の早刈りにより、収量はやや少なくなった。
[中生] 日本晴 (7.2)	並	81.0	80.8	・生育が良好であったことから、収量は平年並となった。しかし、穂いもちの発生した地域で、収量がやや少なくなった。
[中生] 秋の詩 (6.3)	並	90.6	84.2	・登熟期後半の9月中旬に多照となったことから、品質は良好であった。

※1 R4 作付比率はみらいの農業振興課調べ ※2 収量は各農業農村振興事務所から生産者等に対する聞き取り結果から推定 ※3 「1等米比率」は10月31日現在の農水省公表値

3 今後の対策

1. 気候変動に適応した新品種の作付拡大
2. 気候変動に対応した技術の体系化と栽培管理の実践
 - ・肥料など農業資材費が高騰する中、水田の地力をきめ細かく把握し、地力実態に応じた土づくりの推進と、肥料の効果を最大限に発揮する施肥の実践
 - ・「水田土づくりマニュアル」を参考に、土の力を最大限に活用した作物生産の実践
 - ・『「みずかがみ」栽培マニュアル』の改訂など収量・品質の向上に向けた取組
 - ・発生予察に基づく効果的な病害虫防除

4 具体的な取組(参考)

1. 近江米新品種

「滋賀 83 号」

- ・ 本県育成で、気候変動や需要の変化に対応するため、生産者が作りやすく、より安全・安心でおいしい近江米新品種。
- ・ 食味・品質・収量に優れる中生品種
- ・ オーガニック栽培をはじめ、農薬や化学肥料を極力使わない環境こだわり栽培に限定。

栽培方法による区分

- ・ オーガニック栽培
- ・ 環境こだわり栽培(無化学肥料)

生産者の要件

- ・ 原則 60a 以上の作付け。
- ・ 県が主催する生産者グループの研修会等に参加 等

流通・販売

- ・ 当面は JA または集荷団体を通じて一定のロットを確保し、生協などへ特色ある米として流通。
- ・ 学校給食や契約に基づく栽培で流通先を確保。

「みらいの近江米」特設サイト

- ・ これまでの取組、開発秘話など新品種についての情報を発信。



新品種の名称公募

- ・ プロのライター考案の3つの候補と応募作品の中から一般投票(12月下旬～1月末)。
- ・ 名称選考会議にて名称を決定。

生産者の募集

- ・ 出荷等にかかる誓約事項をチェックの上、集荷業者を経由して近江米振興協会に申し込む。
- ・ R5 年産米では 60ha、R6 年産米では 500ha の作付けを目標。

品種登録出願

- ・ 令和5年2月末までに管理センターに申請

2. 収量・品質向上の取組

「水田土づくりマニュアル」

- ・ 温暖化や田畑輪換に伴い、水田の地力は低下傾向にあり、本マニュアルでは地力向上を図るための有機物の活用、効果的な土づくりを掲載。

「みずかがみ」栽培マニュアルの改訂

- ・ 今後もより一層の品質の向上と良食味生産を目的に、現場における多様化する栽培技術への対応や「土づくり」など基本項目を見直す。

土の力を最大限活かす！
「水田土づくりマニュアル」
～CO₂ネットゼロに向けて～

緑肥(ヘアリーベッチ)の活用
牛糞ペレット堆肥の活用
糖原色(COD)の測定
地方の豊富な資源活用
水田地力のみえる化

滋賀県

3. 主要な水稲病害虫

いもち病

- ・ 長雨や日照不足により発生が多くなり、発病する部位により「葉いもち」や「穂いもち」に分けられる。白穂や不稔となり、収量や品質も低下する。



葉いもち



穂いもち

斑点米カメムシ類

- ・ 稲の穂を吸汁加害し、玄米に斑点を生じさせる(斑点米)。斑点米が混入すると検査等級が下がる。



ホソハリカメムシ

クモヘリカメムシ

斑点米